

# 横川末吉先生 (三)

山 本 保

(会員・佐伯市池船町)

わが佐伯史談会の発足は、昭和三十三年三月十六日ですが、これは、鶴岡郷土史研究会の出発の日でもあった。

しかし、「鶴岡郷土史研究会」の看板を収めて、機関誌も「佐伯史談」と改めた昭和四十年一月、新年初歩きに大分市・戸次へ、長曾我部信親の墓にまいり、そして鶴が城山下の成大寺跡をたずねたりした。

それは、史談会の一転機であり、「佐伯史談」第一号の発刊が、同年二月であったし、県内研修旅行の第一歩でもあった。

そして、昭和四十二年一月二日、佐伯史談会は、恒例の新春初歩きを再び戸次町に試みた。

参加者は、堅田から佐脇貫一・染矢勘蔵・岩田善市・岩田正城、そして弥生から古藤田 太・五十川千代見・

伊賀重雄、さらに羽柴弘の各氏九名であった。

松樹茂る山崎公園にある長曾我部信親の墓前におまいりし、天正十四年(一五八六)長曾我部元親の長子として一軍の将となり、戸次川合戦に、二十二歳の若さで壮絶な最後を遂げた武將の姿をしるんだ。

その傍には、明治二十一年、時の大分県知事・西村亮吉によって建立された記念碑もある。

ここから眺める利光城―即ち鶴が城は、本丸を中心として、鶴が両翼を広げたようであり、城主・利光宗魚の最後を含めての籠城死守は、戸次川原の合戦のすさまじさを感じさせる。

それから成大寺へ。

利光氏の菩提寺で、今は無住の庵寺である。境内(庭先)には、利光宗魚の墓や数々の供養塔が立ち並び、そ

の傍には、戸次川の合戦で戦死した四国・最曾我部勢の将士数百人の名前を記した碑があり、また、昨年十一月その遺族・入交氏によって建てられた、真新しい記念碑も建てられていた。

この戦は、島津家久の本隊によるもので、先遣別動隊はこれに先んじて佐伯に侵入、番匠淵での討ち取り物語や、堅田合戦・長瀬原血戦などが行われ、いずれも豊臣秀吉の九州征伐のきっかけをなす緒戦の一つでもあった。

昭和五十八年十月十三日

大分市・芸術会館での田能村竹田祭見学後、佐伯史談会員は、帰路、戸次川原古戦場を見おろす山崎の丘に、長曾我部信親の墓を弔う。

勢いに乗じて、豊後を占領しようとする島津義久家久の軍に対し、死守しようとする大友宗麟・義統と豊臣秀吉の命により、はるばる四国から来援した長曾我部元親・信親父子の連合軍とが対戦したが、軍監仙石秀久の無謀な作戦のため、長曾我部信親以下七百余名が戦死するという悲劇を生んだ。信親の墓を取り巻くように彼を讃える碑や、一族の記念碑、それから石仏などが建立

されて、きれいな公園になっている。

前号では、昭和十一年ごろの横川末吉先生の著作「佐伯惟定」を掲載させていただいた。

今回は、戦後の昭和三十九年ごろの先生の「戸次川合戦」を取りあげた。

## 戸次川合戦

横 川 末 吉

天正十四年（一五八六）、島津家久は、兄島津義久の命を受け、日向（ひゅうが）・薩摩（さつま）・大隅（おうすみ）三国の精兵二万を率いて、日向路（宮崎県）を北上し、鶴目郷（宇目町）の山脈を越えて、豊後国中央部の牙城である鶴賀城（大分市・戸次）を、強襲した。これは肥後路（熊本県）を同じく北上する島津義弘と呼応して、宿敵大友氏（宗麟・義統）を打倒して、一挙に全九州を併呑（へいどん）しようとする島津の軍略であった。

島津氏が、長い間養ってきたその総力をあげて、乾坤

一擲（けんこんいってき）の挙に出たのは、豊臣秀吉の九州征服に先手を打ったものである。

山崎（天正十年）、賤が岳（天正十一年）、小牧・長久手（天正十二年）に勝って、織田信長の後継者としての地位を固めた豊臣秀吉は、天正十三年（一五八五）より、いよいよ全国制覇に乗り出し、まず四国の強豪長曾我部元親を降伏させた。

四国について九州、これは秀吉の全国統一の当然の順序であり、天正十四年（一五八六）は、まさにそのため準備の年であった。十万の兵を動かすとなれば、食糧の確保、輸送路の啓開等、秀吉の力をもってしても、相当な準備期間が必要であった。

島津氏が北上したのは、以上のような秀吉の全国制覇の機先を制する、いわば「待った」をかけたものである。もちろん秀吉は、島津氏の動きを内偵し、その北上に備えることを忘れてはいなかった。

謀將黒田孝高を、小倉に進駐させて九州進撃の橋頭堡とするともに、当時、その勢力の落潮に向かっている大友氏の援軍として、四国勢三千を同年秋、豊後路に送り込んでいた。それは仙石秀久を軍監に、四国の雄・長

曾我部元親・同信親・十河存保（そごうまさやす）の指揮する部隊であった。

さて鶴賀城では、約十日にわたって、島津軍の強襲が繰り返された。府内城は間近に、志気大いにあがった島津軍の強襲を、ここできがちりと支えたのは、城主利光宗匡を中心にした城兵三千の団結であった。

戸次川の激流に臨んで、屹立する城地の天険と、勝手知ったる地形を利用しての決死的な奮戦は、今日にまで語り伝えられるほどである。しかし衆寡敵せずといわれるように、城兵の奮戦にも限界はあった。不幸にも城主宗匡が、島津の手に狙撃されて落命し、その運命はまさに旦夕（たんせき）に迫り、鶴賀城の抗戦も、漸く終わりに近付いたのであった。

佐藤蔵太郎編「鶴賀城戦史」によれば、当時、四国勢は豊後から豊前方面に出動していた。島津軍北上に動揺した大友配下の将士を鎮めて、大友氏の防戦体制を強化するためである。しかし島津軍の北上は予想よりも早く鶴賀城危うしの情報を得た四国勢は、急きょ府内城に取って帰り、府内城の防衛の前線である鶴賀城の後詰に出動することとなった。

時に天正十四年十二月十二日払暁、冬の真盛りの霜の朝であった。

府内城から十五キロメートル、戸次川の浅瀬「園田の渡し」に臨む、断崖に立った四国勢は、朝霧の晴れるにつれて、川上に姿を現わした鶴賀城を、まなじりを決して望見、最後の作戦会議に移った。

「戸次川合戦」四国勢全滅の悲劇は、この時から開始される。しかし周囲のすべては、ただ静まり返って何事もないかのようであった。

秀吉の恩顧をもって、軍監の地位に誇る仙石秀久は、秀吉に対する献身と激しい功名心に燃え、即時渡河進撃を主張した。たしかに、付近には島津軍の姿はなく、渡河には絶好の機会であった。何よりもまず、この鶴賀城を救援しなければならない。秀久の意見に十河存保も同調した。

元親の四国征服にあくまで抵抗した存保は、今は讃岐で僅かに一万石の大名であった。この一戦に家運再興を賭けた存保である。「渡河然るべし」は大勢を支配していた。

元親が過去二十五年にわたる戦の経験、ことに兵力の

不足から割り出した慎重な作戦意見―戸次川に臨む急崖を塁に、府内城と連絡を保ちつつ長期戦を展開、秀吉の出陣を待つという自重論は、ついに葬り去られた。元親の子信親も、出陣を前に秀吉が「構えて軽卒な戦いをしてはならない。時を稼いで自分の出陣を待っておれ」と訓えられたことを楯に食い下がって、慎重論を述べたが秀久から軍監を楯に「弱輩未練」と叱責された。こうして、遂に渡河進撃は決定された。元親も信親も憂悶の心を抱いて、この決定に従うほかはなかった。

森鷗外の叙事詩にあるように、陰暦の師走、氷のように冷たい戸次川に挑んだ四国の人馬は、靈山（りょうざん―五九六メートル）嵐（おろし）を突いて、全員渡河を完了した。

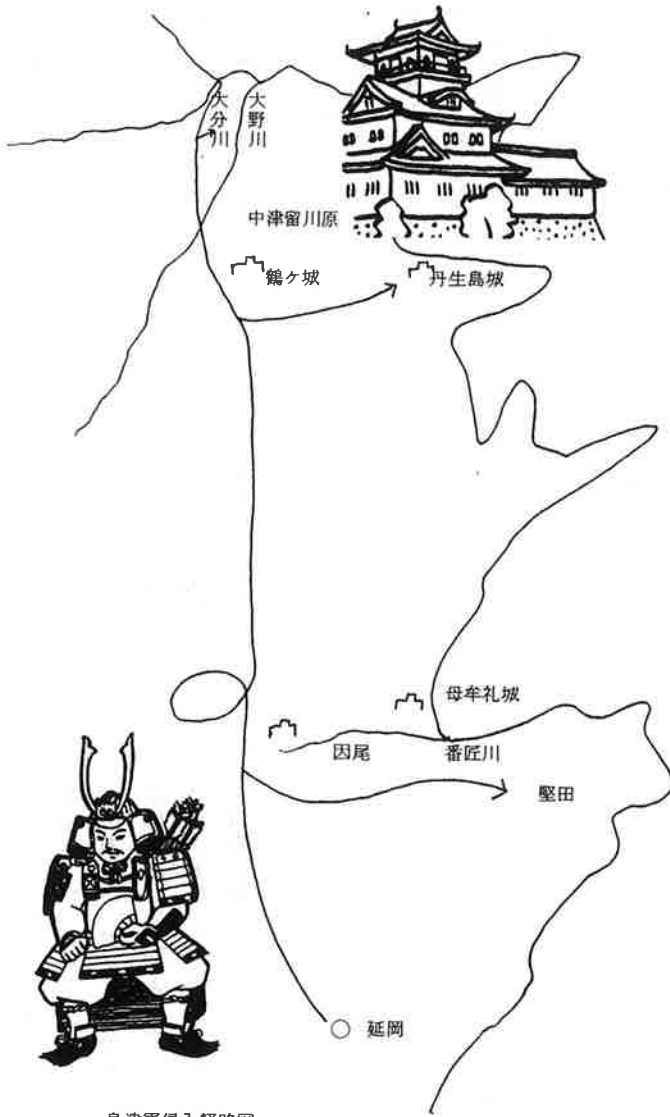
大友勢の戸次統常を最後とした、約六千の部隊は、こうして夕刻、中津留河原一帯に布陣を完了した。島津軍の反撃に備えて、戦鬪体形のまま宿営、明日を期して鶴賀城にも救援の兵をこめよう。仙石秀久は、渡河の成功に満足しきっていた。

しかし、秀久の喜びは早すぎた。慎重な戦術の後退によって、鶴賀城の囲みを解いた島津軍は、忍者を放って

四国勢を探索し、その全容をつかむことに成功した。兵数と装備は、家久の予想よりはるかに劣勢であった。島

津家久は事の以外に、且つは驚き且つは喜んだ。

(つづく)



島津軍侵入経路図